

○ **はらまち九条の会** は憲法第9条を護ろうという会ですが、原発事故問題は憲法問題です。震災以後、①恐怖と欠乏から免れ、平和に生存する権利(前文)、②個人としての尊重(13条)、③生命、自由、幸福追求権(13条)、④居住・移転・職業選択の自由(22条)、⑤健康で文化的な最低限度の生活の保障(25条)、⑥能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利(26条)、⑦勤労の権利(27条)、⑧財産権(29条)、⑨環境権など被災民の諸権利がことごとく、軽視され蔑ろにされています。

心!!!
憲法
1971.5
原町市
小冊子
憲法
本会が二〇一〇年に復刻して発行配付した

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.172

2011(平成23)年 9月19日(月)発行

○震災や原発事故のため、故郷を離れ全国各地に避難している人々が、涙ながらに歌っている「故郷ふるさと」。今「君が代」に替えて“新しい日本の国歌にしよう”という意見も出ています。

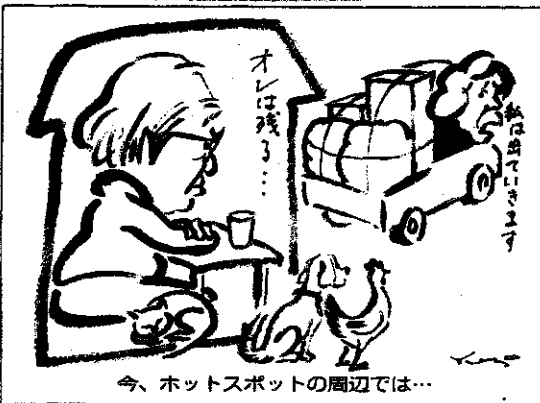
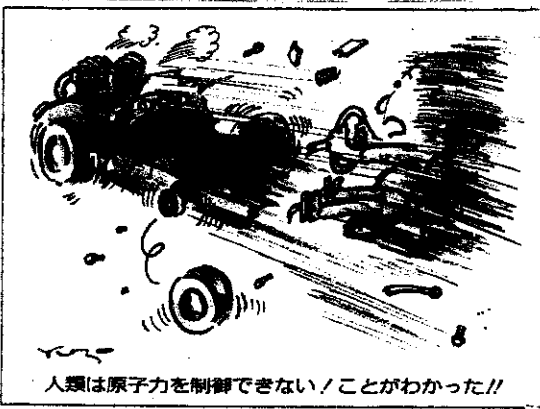
故郷ふるさと 作詞高野辰之・作曲岡野貞一

- 1, 兎追いし かの山
小鮒釣りし かの川
夢は今も めぐりて
忘れがたき 故郷
- 2, 如何にいます 父母
恙なしや 友がき
雨に風に つけても
思い出ずる 故郷

- 3, 志を はたして
いつの日にか 帰らん
山は青き 故郷
水は清き 故郷



○約百年前の1914(大正3)年から文部省「尋常小学唱歌」として歌い継がれてきました○作詞の高野辰之は長野県中野市出身、現信州大学卒の国文学者○鳥取市出身の作曲家岡野貞一とのコンビで、『朧月夜』『もみじ』『春がきた』『春の小川』などの、なじみ深い懐かしい名曲を数多く残しています。



3月の大震災以後、『福島民報』に毎週連載されている「戦災絵日記」。担当している朝倉悠三さんは本会会員で、本会のシンボルステッカーもデザインされています。浪江高校、原町高校、相馬高校の美術の先生でした。



戦災絵日記
絵題字 朝倉 悠三(県美術協会員)



朝倉 悠三
朝倉 悠三

東日本大震災で南相馬市から会津若松市に避難している画家の朝倉悠三さんの連載「震災絵日記」がみんなのひろば欄で始まる。朝倉さんは「被災者が書いた」。

朝倉さんは南相馬市出身で元高校美術教師。県美術協会員、全日本水墨画会員、馬の絵コンクール審査員。題字も朝倉さんが書いた。

南相馬から避難 画家朝倉悠三さん

被災画家が描く「震災」

地の様子や避難者の暮らしぶり、思いなどを、自らの日常を通じて表現したい」と話す。随時掲載する。

放射線量の高い所へ避難した浪江町民

原子力発電の安全神話は、東日本大震災と高波によりくつがえされた。広島、長崎は核兵器の被害者となったが、今度は平和利用のはずの核が日本人自らの手で起こした人災事故の加害者となってしまったのです。国は第一に何を守るのですか？東電ですか？国民は二の次ですか？報道にも不信感を覚えしました。チェルノブイリやスリーマイル島の事故に、国は何を学んだのですか？

原発事故直後に国、県、浪江町、東電から一切の連絡もなく、後で報道で知ったことですが、20km圏内の浪江町民たちは放射線量の最も高い阿武隈山系にそって避難していたのです。私たち家族も3月12日に自家用車で浪江町の家を出て、津島、二本松、郡山と避難先を変え、15日に東京の子供達の所に一時落ち着きました。それも後で知るのですが、15日に放射能が関東にまで流れて行ったこと、それも知らされてはいませんでした。

そして東京では、自分達で必死になって一時定住先を探す日々でしたが、3月26日から長野市の県営住宅にお世話になっています。孫も1年生の入学に間に合い、お友達も沢山出来て、元気に外で遊べるので幸せです。福島の子供達は目に見えない放射線に苦しみ悩み、思い切って外では遊べない状態を思うと、避難指示区域の除染よりも人々が住んでいる所を優先して除染してほしいと思います。

両親は満州引揚げで津島に入植し苦労した

私の両親は66年前、満州から引き揚げて、阿武隈の山間部高地の浪江町津島地区に開拓農民として入植し、苦労を重ねてきました。私の代になり、石材業を40年間働き続け、築き上げてほっとしたのも束の間でした。築き上げたものは、この原発事故でゼロに等しくなり、この先休業状態がいつまで続くのでしょうか。なかなか避難指示区域の進む方向が指示されないもどかしさ。そして、この避難生活の心労から92歳の母は病気で倒れ、私達とは別れて栃木県さくら市に入院。しかし8月10日、私も臨終に間に合わず、一人で寂しく亡くなりました。

先の見えない生活も半年過ぎました。浪江町を代表する方々、町民のこれからの生活や補償を一生懸命国に働きかけて下さい。目に見える形で町民に示して下さい。私達は涙もかれ、故郷への未練はありますが、現実の生活をはやく見出したいのです。

このような原発事故を二度と起こしてはならないし、自然エネルギーで脱原発をめざし、電力会社を国民が選べるようにするべきです。また事故の収束のために働く人々に深く感謝しております。一日も早く放射線が低くなって欲しいです。政治家には希望が持たませんが、野田総理が言われた「福島の再生なくして日本の再生なし」に期待したいです。

(浪江町・避難先の長野市にて 今野ますみさん)
※9月27日付「福島民報」には、ご主人の今野庄治さんの投書「真の復興を」が掲載されています。



津波の石巻市で、死を覚悟した

あの日、3月11日、私は石巻市立病院で仕事をしていました。地震の後ですぐに1階の外来から4階の病棟に、外来患者さんや職員と一緒に避難しました。津波の勢いは想像以上で、筆舌に尽くしがたく、中に人が乗っている車や、壊れた家屋、さらにそれらが火に包まれた状態で、病院の回りを引き波で流されていくのを、ただただ見ているだけで、何もできませんでした。

その後3日半、孤立した病院に、水も食料もほとんどない状態で(備蓄食糧はほとんどが津波の被害にあった1階にありました)閉じ込められた後、患者さん全員を災害医療チームのヘリで搬送し、自分達も自衛隊のヘリで救出されました。

仙台の自宅は被害なしで家族も無事でしたが、単身赴任の石巻のアパートは全壊し、車は流され、勤め先の病院も未だに仮診療所であらうじて診療していますが、診療機能はほとんど果たせない状態です。6月から私は、なんとか東北大学病院で仕事をしています。

今回の震災は、生まれて初めて自分の死というもの強く意識した経験でした。生来楽観的なのか、あまりトラウマになるほど精神的に参っているわけではないのですが、今自分がここにいることが、やはり何らかの運命であって、亡くなった方の分までしっかりしなければと思っています。

(相馬市出身・仙台市青葉区・医師 Aさん 34歳)



原発を誘致した人々は今、どんな気持ちで

昨年の秋、浪江町の請戸の鮭のヤナ場を見学し、帰途、東北電力の広大な小高浪江原発建設予定地を通りました。不毛の笹ヤブでしたが、地元の原発誘致の気持ち、痛いほど伝わってきました。大熊町、双葉町の優遇ぶりをみれば、当然、わが町にもと思う気持ちはわかります。あの時、第一原発誘致を主張した人々は、今どんな気持ちでいるのでしょうか。知りたいものです。

新地町釣師浜の我が家は津波ですべてを流されて一週間ほど、新地町の高台にある妹の家に避難しました。放射能が降りかかっているのも知らず、野菜をいっぱい食べました。その後、仙台に嫁いでいる長女夫婦が迎えに来てくれて、仙台に移りました。仙台も被害がひどく、特にガスなしで入浴できない日が続き、ガソリン、灯油をはじめ、食料品はどこでも手に入らず、大変不自由な生活を体験しました。4月末に家内のいとこにあたる人の好意で、会津若松市に移り、現在に至っております。

それにしても政治の貧困には全く腹が立ちます。原発政策を誘導しながら、その反省もせず菅おろしに熱中する自民党、それに同調する公明党と一部民主党、それをあおるマスコミ。クーデターでも起こしたくなります。

(新地町・会津若松にて M. Sさん)

